

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 優秀賞

## 流れ星

千代野小学校五年

東 ひがし 史華 ふみか

受賞の言葉

優秀賞をもらえたとき、すごく驚いたけど嬉しかったです。このお話は夏休みの流れ星を見る合宿に行った時に思いつきました。今までの経験からお話を書くのは面白かったので、今後も小説を少しずつでも書こうと思っています。

今日は、待ちに待った合宿の日だ。

この合宿の目的は、ペルセウス座流星群を見ることがだ。今年はおぼんの時期にピークをむかえるらしい。

少し天気はあやしいが、私はわくわくしてバスに乗り込んだ。その時、「あっ。」

私は、バスの一番後ろの席に座っていたハルトを見つけて、固まった。ハルトも気付いたようだ。すぐに、となりの人と話し始めた。

私は気まづくなって、ハルトから一番遠いところに座った。

「ねえ。まだ仲直りしてないの？」

おくれてやって来たナオが私に聞いた。

「うん。……：：：したいんだけどね。」

「ふうん。早く、元にもどれたらいいね。」

「……：うん。」

少し間を空けて、私は答えた。

しばらくして、バスが発車した。

それから、私はハルトのことが気になって、せっかくのきれいなおふるも、豪華な食事も楽しめなかった。

宿泊場所に着いて、軽い仮眠をとる時間があった。私はふとんの中にもぐりこんだが、暑いだけで、全く眠れなかった。

そして、星を見る午後十一時になってしまった。

当たり前のことだが、私は眠くて眠くてしようがなかった。

「うー、眠いー……：。」

「何言ってるんだよ、ハルト。流れ星が見られるんだぞ。」

「でも眠い……：。オレもうダメ……：。」

「しゃきつとしろよー。何しに来たんだよー。」

半分あきられているハルトに、私はあわれみながらも、少し笑ってしまった。

「こら、その五年生組ー！シートしくの手伝えー！」

「はあーいっ！」

真っ暗なので、かい中電灯をつけて、私達五年生組はシートをしくのを手伝った。この上にねっ転がるのだ。

「はあい、じゃ、学年ごとに分けようかー。」

「ええっ!?」

ハルトがびっくりしたような声を出して、ちらりと私の方を見た。私は、

「チャンスだよ！あやまつちゃおうよ！」

という思いと

「えー、別に今度でいいじゃーん。」

という思いの間でまよっていた。

そして、私、ナオ、ハルト、その他二名の五年生組は、ひとかたまりになってねっ転がることになった。

「わあっ、すごーいっ！」

山の中の夜空は、まるでプラネタリウムを見ているようだった。

「すごいなあ。天気予報、雨だったのに。」

となりのナオのつぶやきに、私がうんうんとうなずいた時、

「あーっ!!」

ナオがでっかい声でさげんだ。空を指差している。

「なーがーれーたーっ!!星ーっ!!」

周りがそう然となった。

「アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！アンコール！」

男の子達が手をたたきながら空に向かってさげんでいる。

ハルトの声も交じっていた。

思わずハルトの方を向くと、ハルトは私に気付いて横を向いてしまった。

つまり、同じ方向を見た時、

流れ星が流れたのが、見えた。

「あああああああああ!!」

「おおおおおおおおお!!」

周りの人達も、さけんでいた。

「流れたあーっ!!」

「流れた流れた流れたあああ!!」

流れたのは分かっているのに、私とハルトはさけび続けた。体を起こして、

「見たっ？見たよね！流れたよね！」

「うんっ、見た！すっげー！」

急に、ハッとした。

周りはさわがしいし、今なら言えるんじゃないか、と思った。

「こ、この前はごめんっ！」

ぶっきらぼうで早口だったけど、言えた。

「こっ……こっちこそ。ごめん。」

私もハルトも、急にはずかしくなあって、顔を見合わせて少し笑った。

そして、ころんと横になった。

ナオがサムズアップのサインをしてきたので、私も同じサインで返した。

コロコロコロ……と虫が鳴く声が聞こえた。

天然のクーラーみたいな風がふきぬけていった。

すごく、気持ちよかった。

夜空に、ひとすじの明るい光が現れ、静かに消えていった。

